

大阪府立病院機構

呼吸器・アレルギー医療センター  
アトピーアレルギーセンター長

片岡 葉子先生

今回は大阪府南部羽曳野（はびきの）市にある近畿一円の呼吸器疾患、アレルギー疾患の中心的な役割を果たしている呼吸器・アレルギー医療センターに片岡葉子先生を訪ねご多忙の中、お話を伺ってきました。

（記 オフィスメイ 三原 ナミ）

### ——重症の患者さんが多いとお聞きしますが？

私たちの病院は赤ちゃんから大人まで、他の病院でいろいろやってみたけれど、よくなるなくて受診される重症の方がほとんどです。かつての我々のアプローチとしては、何が悪いのか、原因悪化因子を見つけて取り除こうという考えを中心に取り組んでいました。しかし、原因と思われることを取り除いてもなかなか良くならない方が多く、治療結果の満足度は不十分でした。そういった反省をもとに、私たちが見直した重要なポイントとして、実は塗り薬の治療が不十分のために重症になってしまっている方が非常に多いということが解ってきたんですね。アトピー性皮膚炎とは皮膚の炎症ですから、火事の原因を取り除くだけではなく、一旦起こってしまった火事を完全に消すことも重要です。消火が不十分だと、火事はどんどん拡大してしまいます。その結果、炎症が全身に拡大して、重症になって受診される方が非常に多いとわかってきたんですね。

アトピー性皮膚炎の治療では、原因悪化因子を考えることも必要ですし、大人ならストレスが関係していることもあります。そういう要素にも取り組みながら、はやく消火できる正しい薬の塗り方で早く改善するところに今は特に力を入れていますね。

もう一つの私たちの仕事は、患者さんを診察するだけでなく、常に患者さんの治療の効果や検査データを定期的に振り返って、エビデンスを自ら明確にしていることにあります。

### ——重症の患者さんの治療についてお聞かせください。

2009年に改定された日本皮膚科学会のアトピー性皮膚炎の治療ガイドラインで、初めて登場してきた治療の目標として、“患者さんの皮膚炎症状があったらすみやかに寛解（症状のない状態）させなさい”ということが明記されています。

寛解させるためには正しいステロイドの塗り方が重要です。病院で薬をもらっても、どこにどういうふう塗りにささいとは言われなくて、ちょっとましになったら止めるということを繰り返してしまう。それでは、対処療法ですよ。やっぱり、ステロイドは一時抑えの薬だと思ってしまいます。

実は、ステロイドをぬっても症状が繰り返されるのは、ツボをおさえた塗り方をしていないからなんですね。そのことが、分かってきたのは、2008年から保険で検査できるようになったTARCという血液検査の動きをみることでわかってきました。

また重症の乳幼児アトピー性皮膚炎では食物アレルギーを合併しやすいことはよく知られています。重症のアトピー性皮膚炎の赤ちゃんで、血液検査で食物アレルギーの陽性がわかると「卵か、牛乳か、小麦か・・・」とたいがいの方は一生懸命除去されますが、通常食物除去だけでは改善しません。実は食物アレルギーが原因なのではなく、湿疹が先で、食物アレルギーはその結果なのということが明確になってきました。湿疹の爆発的な暴走が、（つまり皮膚炎症をおこしているリンパ球という白血球が非常に活性化しているという状態なんです）、拡大していきながら、IgE（アトピーで活性化したリンパ球が作る）がどんどん増えていきます。IgEの数値が爆発的に上がれば、卵も牛乳も小麦も陽性になってしまうということになっていきます。

ステロイドの塗り方がまずくて、湿疹が続いていると、どんどん数値があがってしまいます。見るからにも血液検査でも重症の赤ちゃんは、出来るだけ早く寛解させるようにしています。初期には相当しっかり薬を塗らなくてはいけません。2週間から1ヶ月ぐらいで寛解させて、それからゆっくり減らしながら、できるだけ少ない薬でキープしながら、薬を塗らなくてよくなるまで送りとどけるという治療をしています。

## 片岡葉子（かたおか ようこ）先生プロフィール



略歴

大阪府立羽曳野病院皮膚科を経て現在、  
大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター（名称変更）皮膚科部長  
同高度医療センター・アトピーアレルギーセンター長  
日本皮膚科学会専門医・日本アレルギー学会指導医  
日本心身医学会認定医

このような治療で食物アレルギーが相当減らせるということが分かってきました。

そこを間違えると大変です。赤ちゃんの湿疹がひどくなってきたときに「卵かしら牛乳かしら」ともたもたしている間はもうないんですね。最初に爆発したときに早く落ち着かせてあげることが大切です。もたもたしている間にどんどん拡大してしまう。そうなるから治そうと思うと莫大な薬も要りますし、一旦食物アレルギーになってしまうと母子ともに苦労が大変です。

われわれの治療のスタンスの違いで将来の結果が大きく違うことが分かってきたので、自信をもって、積極的に正しいステロイドの塗り方をする、そういう取り組みをしているんですね。

同じようなことを成人の方にもしています。早期に寛解させるような塗り方をしていないので重症になってしまっておられる方がとても多いのです。具体的には、薬をどこにどれ位の量をいつまで塗るのか、ということをお知らせに、塗っていることが多いと思います。

私たち医師は、忙しい診療の中で患者さんに塗り薬をこういう風に塗ればよくなるということ、正確に100%伝えるのは難しいことだなどいつも感じています。日常生活やストレスの問題についても同じです。そこで、患者さんの教育プログラムを確立して、ずっと困ってこられた重症の方を対象に、2週間の入院の間に看護師、薬剤師、栄養士、心理士とチームを組んで診療する取り組みをしています。皮膚に対してはその間、2週間で寛解に持ち込めるように、一生懸命私たちが手伝って薬を塗ります。これまで150人以上の方が受けられて、多くの方が好転されていて、そういうこともふまえて薬の使いかたは大切だとなつくづく感じますね。

### ——入院中の学校教育の支援についてお聞かせください。

アトピー性皮膚炎というのはまだまだ世の中で、誤解されています。極端にひどくなっているお子さんも少なくない。もちろん痒いですから夜眠れなくなります。眠れなくなったら朝起きられなくて学校に行くのが遅れたり、痒みで勉強に集中できなくて、ついていけなくなったりします。見かけも、もちろん気にしますし、学校でいじめにあたりやすなお子さんもあります。時には、アトピーがこじれてしまうひとつの理由としてご家庭の問題があったりとか、地域の学校での問題があります。そこで、府立羽曳野支援学校と提携して、子どもたちに対して支援をしようということで、入院してアトピーを改善させながら学校の先生たちと共同で子どもたちの問題を見つけて改善して、学校へ無事にもどっていただけるようにする取り組みもしています。

——本日はご多忙のところお時間を頂戴し有難うございました。